

第 39 回地盤震動シンポジウムで登壇しました(2011/11/15)

11月15日(火)、建築会館ホール(東京都港区)で第39回地盤震動シンポジウム「2011年東北地方太平洋沖地震で何が起きたか—巨大地震に備えるための地盤震動研究(その1)—」が日本建築学会(構造委員会、振動運営委員会、地盤震動小委員会)の主催で行われました。本シンポジウムは、近い将来南海トラフでも巨大地震の発生が懸念されていることを踏まえ、まずは東北地方太平洋沖地震で起こった現象を整理して課題を共有することが重要であるという認識のもと、震源と地盤震動、構造物応答と振動被害、津波と構造物被害について、観測記録の分析や解析の現状を紹介し、今回の地震で提起された課題に対して、今後取り組むべき方向性を研究者と実務者を交えて広く議論する場を設けることを目的として開催されました。当センターからは、源栄教授が特別講演で登壇し、大野准教授が今回の地震で観測された強震動の解析結果について発表を行いました。今後の地震想定のある方、地盤震動特性、液状化や津波と構造物応答について議論が行われ、次年度も引き続き巨大地震をテーマとする予定であることが報告されました。

特別講演

源栄正人：東日本大震災を経験して思う地盤震動研究の重要性

セッション2 震源と地盤震動

大野晋：2011年東北地方太平洋沖地震で観測された強震動